

南吉とわたし ②3 俳優 間瀬 富未子



新美南吉さんとの出会いは、生誕80周年・没後50周年記念ミュージカル「ごんぎつね」でした。彼の名作の数々をつづったその作品は、1993年に初演され好評を博し、1995年の再演時には、南吉さんの出身地である半田で開幕。その日は当時7歳の私にとって、忘れられない1日となりました。

この作品の中で、「明日」という詩を歌うシーンがあり、私が所属していた半田少年少女合唱団の子供達が、一緒に参加し歌う事になったのです。初めて間近でみるプロの役者達。出番に向けて、楽屋廊下から舞台袖に向かって歩いていく「ごん」の後姿を、今でも、鮮明に覚えています。翌日から、我が家のソファは私のステージとなり、「ごんぎつね」ごっこが連日繰り返されました。

合唱団ではその後も、彼の作品を度々歌いました。中でも、大中恩さんによって作曲された「貝殻」は、強く印象に残っています。朗らかな童謡とは違い、内なる悲しみを表現した静かな楽曲ですが、幼ない私はこの曲を好んで歌っていました。子供にはまだ分からないだろうと妥協せず、奥深い作品を教えていただいた経験は、私の人生に大きく影響を与えたと思います。今後も子供から大人まで沢山の方にふれていて欲しい名曲です。

10年の時が流れ、成長した私は音楽大学で学びながら、舞台俳優になる夢を叶えることができました。初めての商業演劇デ

ビュー作品で、ミュージカル「ごんぎつね」に出演していた役者の先輩方と共演できた時は、心の底から嬉しかったのです！

大学を卒業してからは、ミュージカルスクールや芸能事務所などで、舞台を目指す子供達の指導者としても活動を始めました。出会いや経験に恵まれ、充実した日々を送る中で、突然。――演劇の灯が消えた。止まってしまった私たちの時間とは裏腹に、はじめて使う言葉が、次々に入り込んでくる。三密・ニューノーマル・社会的距離・Zoom・不要不急、不要不急、不要不急……。

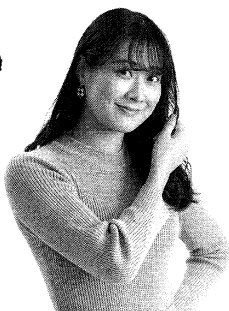
段階的に訪れる悲しいニュースに何度も衝撃を受ける中、ふと目に止まったのが、新美南吉記念館の「#明日をとどける」という企画。南吉さんの詩「明日」を、自分らしいパフォーマンスでツイッターに発信しようというお知らせでした。私は「歌いたい！」の一心で、すぐに作曲にとりかかりました。

7歳の頃歌った思い出の曲。あの頃は、先生方によるご指導のもと、ひとつひとつ音をとり練習をしていましたが、今は自分がイメージした音と声で誰かに届けるまでを、一人で出来る様になったんだな。と、ピアノに向き合いながら感謝の気持ちがあふれました。後日、この映像の撮影をした場所が、南吉さんが上京時代に暮らしていた街であった事を知り、不思議なご縁も感じました。

時を越えて、夢を与えてくれた南吉さん。

短い生涯の中で、命を燃やし創り上げた作品は、今もなお私達の心に生き続け、芸術の尊さを教えてくれます。その素晴らしいを受け継ぎ、今後も子供たちと音楽を楽しみながら、美しいものを愛する心を育んでいけたらと思います。

間瀬 富未子



武蔵野音楽大学声楽学科卒。Broadway Dance Center Theater course 修了。東宝芸能所属俳優。ファミリーコンサートを中心に幅広く活動中。乳幼児の音楽指導や、教育プログラムの開発、劇団四季や東宝ミュージカルに子役を輩出するなど、後進の育成にも力を入れ取り組む。主な出演に、ミュージカル「魔女の宅急便」絵描き

役。「赤毛のアン」「だいすけお兄さんの世界迷作劇場」全国ツアー。NHK「紅白歌合戦」テレビ朝日「ミュージックステーション」など。